

「テレビも悩む日本語」

ーテレビに携わるすべての人には、正しい日本語を視聴者に届ける義務があるー

講師 株式会社ジェイアソシエイツ プロデューサー 河本和美氏



埼玉平成高等学校は、“人と人をつなぐ言葉を適切に使い、人前で自分の考えをきちんと伝えることのできる、優れたプレゼンテーション能力をもつ人間を育てたい”ということで、日々の指導の中に「言葉の時間」を設けて日本語と英語の二か国語を磨き、日本語検定・英語検定に取り組む学習を行っている。目指すは、言葉に強い生徒の育成。年に一度開講される「言葉の教育」講演会には、今年も中学生を含む千百名が受講。講師は、バイタリティー溢れる行動力で人生を切り開き、日本語検定1級保持者でもある、株式会社ジェイアソシエイツ プロデューサーの河本和美氏。

日本語に関心を持つことが、皆さんの“これから”にどれほど良いことをもたらすのか。そして、私が携わっているテレビの仕事、今の仕事に就くまでのプロセスをお伝えすることで、皆さんの今後の人生にちょっとでもプラスになれば、という思いを込めて話します。

「天職」は自らの好奇心が導いてくれる

まず、自己紹介から。広島県呉市の出身で、地元の中学、高校を卒業し、広島大学の教育学部に入学。卒業後、「体育の先生になりたい」という中学生からの夢を叶えるべく、高校の体育教師になりました。夢は叶えたものの、「ダンサーになりたい」という新たな夢に突き動かされ、先生を辞めて上京。その頃の私は、自分の欲望のままに、

なりたい自分を追い求めていました。ところが、東京に出てもダンサーだけで食べていけるはずもなく、アルバイトをする中で辿り着いたのがテレビのバラエティー番組を作る制作会社だったのです。

それまで、テレビの仕事をしたなんてまったく思っていなかった。ただ、ダンスの仕事やアルバイトをしても、「今の私は本当の私じゃない」と満たされない虚無感を抱えていました。ところが、テレビの仕事に就いてみると、徹夜続きで大変な仕事にも関わらず、「これが私の天職だ！」と思えたのです。自分がやりたかった、これこそ自分らしく居られる場所。そういう仕事に出会えた私は、とても幸運だったと思っています。

テレビ番組は、ネタ探しに始まり、関連する情報を集め、集めた情報を元に企画を立てて具現化する。私は、ネタを探し出すリサーチャーという仕事から制作の仕事を経て、現職のプロデューサーになりました。番組のエンドロールの一番最後に名前が出るのが、プロデューサー。つまり、番組の全責任を背負う仕事です。ですから、番組に関するトラブルが起これば、当然、私が謝りに行く。だからこそ、番組の内容はもちろん、流す日本語にも厳重なチェックが欠かせないのです。

日本語のレベルを測る 唯一の検定試験が日本語検定

バラエティー番組は、番組にもよりますが、大抵の場合、構成作家やディレクターが台本、AD（アシスタント ディレク

ター)がカンペ(進行台本の内容を、出演者が現場で確認しながら喋るための紙)、スーパーテロップ(画面下等に表示される文字)を作ります。カンペに間違った日本語が書かれていると、司会者や出演者はそのまま発言してしまうことがあるし、スーパーテロップなども間違いがないようディレクターやプロデューサーがチェックするので、ところが、チェックしている人が日本語のスペシャリストかということ、そうではない。日本語をきちんと勉強している人はほほいしません。日本では、テレビの仕事に就くのに何の資格もいらないから誰でもなれます。一方で、そういう人たちがテレビを作るわけですから間違いも多い。そうした危惧もあり、私は正しい日本語を身につけたいと、日本語検定1級を取得しました。

一時期、某テレビ局で仕事をしていたのですが、制作会社の作品をチェックする際に、制作会社の人から「なんで、河本さんに日本語をチェックされなくちゃいけないんですか」と言われたことがありました。もちろん、「国語が得意だから」なんて言えるはずもなく、自分の日



本語力を明確に示す基準はないかと、インターネットで必死に探したのですが見つからない。外国人用の日本語の試験はあるのに、日本人が受けられる日本語検定はありませんでした。諦めかけていたところ、たまたま友人から、知人が日本語検定を立ち上げたので受けてみないかと声がかかったのです。もちろん、すぐに申し込みましたよ。3級、2級まではすんなりいきましたが、1級は難関。多忙な仕事の合間を縫っての勉強で何年もかかりました。毎回、四字熟語で落とされていたので、試験前は四字熟語ばかり覚えていた記憶があります(笑)。

影響力のあるテレビに関わる 制作者は日本語を磨くべき

タレントさんやナレーターさんの日本語を訂正すると、嫌な顔をされる方もいらっしゃいます。そこで、「日本語検定1級なんですよ」と自慢にならないよう、やんわりと言うのですが、説得力はありますね。言葉に強いていうのは、もの凄い強み。言葉に対しての文句は言われたいし、日本語はあの人に任せておけば大丈夫っていう太鼓判を押される。周りの人が持たないスキルだからこそ、より力を発揮します。個人的には、テレビの演出に関わる人はすべて、日本語のスペシャリストになるべきだと思っています。なぜなら、テレビの影響力は大きい。正しい日本語を視聴者へ届ける使命があります。



私が言うのもおかしな話ですが、テレビを見ながら間違い探しをすることをお勧めします。頭の体操にもなりますよ(笑)。たとえば、「みぞれ混じりの雨」と言う人がいますが、「みぞれ」はすでに雨と混ざった状態ですから、「みぞれ混じりの雨」は間違い。「みぞれ」は「みぞれ」。残念ながら、放送する前にすべてを正しい日本語にできるかというと、厳しいのが現状です。ですから、テレビを見ている皆さんが、「今の日本語はおかしいな」と思ったら辞書で引いてみる、鵜呑みにしない。そんな視点を持って、言葉の勉強に役立ててほしいのです。

さらに、語彙力を深めると人間力は格段に上がります。将棋の藤井聡太七段(2018年現在)が良い例。20連勝した際、「僥倖としか言いようがない」とコメントしました。思いがけず幸福に合うという意味ですが、実は、私も日本語検定のテキストでは見たことはありましたが覚えていませんでした。また、「実力からすると望外の結果」とも。望外(望んだ以上に凄いこと)なんて言葉、とっさに出ますか？

彼の話し方だけで、「この人は頭がいいな」、「賢いな」と思われる。ここにいるみなさんも、言葉を覚えて正しく話すだけで賢く見えるんです。誰にでもできることだと思いませんか。

どんな状況でも諦めるな！ 諦めなければ道は開ける

今日皆さんに一番伝えたかったこと。それは、「何があっても諦めない！」ということです。2つの事例を紹介します。まずは、私自身の話から。最初の自己紹介で、広島大学卒と言いましたが、最初の受験は失敗しました。それまでの人生では、全くミスしたことなかったのに、人生初の挫折を経験しました。浪人を許さない親でしたから、体育科のある岡山の短大へ行きましたが、広島大学を諦められなかった。過去にもその短大から挑戦した人はいましたが、受かった人はゼロ。先生からも無理だと言われました。でも、私はこう思いました。「受かった人がゼロなら、私が初めての人になろう！」と。無我夢中で勉強して受けた結果、合格！

皆さんも、周りから「無理だ」、「辞めた方がいいよ」と言われても、本当にやりたかったら自分を貫いてください。前例がなければ、自分が前例になればいい。私が受験で身につけた教訓は、後の人生にも生きています。仕事で、「今までそんな企画やったことない」と言われても、問題を1つずつクリアして形にする。諦めなければ可以的！

だから、皆さんも諦めないでほしいんです。

さて、大学でテレビ作りの講義をすると、何人もの学生がアルバイトの相談に来ます。その中でも一番熱心だった大学4年生の話。私のアシスタントとしてロケにも連れて行きましたが、大学4年生なのに仕事ができる。これまで100人以上のADを採用しましたが、彼女は中でも抜群に仕事できました。タレントさんやヘアメイクさんも、「学生なの？」って驚くくらい。彼女はマネージャー志望でしたから、大手のマネジメント会社を何社も受けたのですが、全部落ちたんですよ。仕

事できるのに。あんなに即戦力になる子いないのに。パッと見は派手じゃないし、堅実でおとなしい感じだからなのか、初対面の面接では認めてもらえない。全部落とされた彼女は、「私はほんとにダメな人間だ」と泣いてました。私は「絶対そんなことはない。面接であなたの良さが伝わらなかっただけ」と声をかけましたが、それは単に慰めたのではなく、彼女の実力を認めていたからです。案の定、彼女は今や引く手あまたで、紹介する先々で、「ぜひ、うちに、うちに」と声がかかります。

皆さんも、将来、就職活動で落ち込んでしまうような状況になることがあるかもしれませんが。その時は、「たまたま面接官が私の魅力を解ってくれなかったんだ」、「僕の長所に気づいてくれなかったんだ」と思って、胸を張って前に進んでください。決して、「自分なんてダメなんだ」なんて思わないで。諦めずに頑張ってくださいね！

